

広域平和研究

COE 拠点リーダー：村上陽一郎

研究の進展と成果

本学 21 世紀 COE プログラム「『平和・安全・共生』研究教育の形成と展開」を総括するに当たって、これまでの研究活動を振り返ることから始めることにしたい。この研究活動に取り組むに際して、最初に立てられた目標の一つは、「世界に発信する、世界を巻き込む」ということであった。すなわち、アカデミアの論文を生産することだけに満足してしまうのではなく、私たちが生きる世界とどのような接点を持つのか、どのように社会に貢献できるのか、という問題意識である。それは事業を推進する教員のみならず、若手研究者にも言えることであろう。レフェリド・ペーパーを書くことを通じてキャリアを積むことはもちろん重要だが、同時に、研究者ではない人々に対してもメッセージを発信していくこと、日本だけでなく世界に対しても、英語をはじめとする諸言語で発信していくことが期待されていた。現時点で振り返るならば、100%の達成とは言えないとしても、多くの成果を出すことができたと思う。例えば、ここでは書籍に限って見るとしても、風行社から刊行の「ICU21 世紀 COE シリーズ」、ワシントン州立大学(WSU)との提携によって実現した英語による文献の数々、各グループが刊行している数多の研究成果などを挙げるができる。

中間評価の際には、本学 COE の課題である「平和・安全・共生」のグランドセオリーを早急に形成し、各グループがそれを共有した上で最終的な成果を出すことが望ましいとの見解が示された。この点についても、創意工夫を重ねることにより、その実現に努めてきたつもりである。例えば、「グランドセオリー・セミナー」を度々開催し、理論研究に重点を置く事業推進担当者を中心に、グランドセオリーの構築が試みられた。その過程に、事業推進担当者のみならず、各グループの研究協力者や COE 共同研究室の若手研究者も参加し、活発な討議が展開された。更には、WSU との共同開催による国際会議を通じて、海外の研究者諸氏もグランドセオリーの構築に積極的に関与したことは、国際的な研究拠点作りを進めてきたことの具体的な成果であろう。もちろん、グランドセオリーとして提示されるものと、各グループの個別の研究課題の間には、様々な緊張関係もあった。しかし、各グループの成果も見据えながらグランドセオリーが構築されてきたという点で、ボトムアップ型の事例研究とグランドセオリーとの相乗効果が得られたことは確かである。

このような過程を通じて認識の共有が進むと共に、グループ間での相互乗り入れが次第に実現していったことも挙げておきたい。特に、本学社会科学研究所の協力によって毎年度刊行された『社会科学ジャーナル COE 特別号』には、毎回数多くの論文が掲載された。事業推進担当者や研究協力者だけでなく、大学院生も含む若手研究者が多数寄稿した。そこで提示された論文は、それぞれのグループでどのような研究がなされてきたのかということ、具体的な形で共有する有効な手段となった。また、それはグループ間だけでなく、グループ内で各々の論点を集約し相互理解を促す助けにもなったであろう。本学 COE の研究課題に則って開催された、本学社会科学研究所と上智大学社会正義研究所との共催による国際シンポジウムも、認識の共有を COE 全体で試みた一例である。こうして、多数の多様な刊行物や会合を通じて、グループ内外での意思疎通を図ると共に、学内外へ定期的に研究成果を発信することができた。

教育と社会貢献

教育面でも、本学 COE は大学院生や博士号取得済みの若手研究者に対して、様々な機会を提供してきた。その中心となったのが、毎年度実施した院生奨励金事業である。この事業を通じて、若手研究者の「平和・安全・共生」に関する研究活動を支援することで、各々の問題意識を深める一助になったはずである。もちろん、若手研究者たちが携わった研究は未だ途上にあり、今後の研究活動を通じ



て更に開花していくことだろう。そのきっかけを、研究資金だけでなく、前述の『社会科学ジャーナル COE 特別号』等の投稿媒体も含めて提供したことの意義は大きい。また、本学 COE のリサーチ・フェローとリサーチ・アシスタントが在籍する COE 共同研究室の活動も、ぜひ挙げておきたい。国際会議、グラントセオリー・セミナー、その他各種会合等の計画、ロジスティック、実行に関わる中で、学問の世界で必要となるコミュニケーション方法や各種のスキルを学ぶこととなったはずである。これらは、研究者を育成していく上での不可欠な要素であり、日頃の研究活動を通じて体得できたのではないだろうか。その中にはすでにアカデミアやその他の機関で活発な活動を開始している人材もあることは嬉しい。

社会貢献という点では、「三鷹ネットワーク大学」の開催がその一例である。三鷹市との提携によって開催されたこの企画には、研究者ではない多くの人々の参加があった。また、この活動をきっかけとして、各種の市民講座が開催されるなど、「三鷹にある ICU」という、地域に根ざした大学としての研究活動が展開されたことを、ここで強調しておきたい。講義形式の企画以外では、「白バラ展」にも多数の来場者があった。この企画は、地域と世界をつなぐ回路を提供するものでもあったと考える。ヨーロッパにおける第二次世界大戦以降の平和の問題を考えることは、私たち自身の生活にも直結していることを、多くの人々が実感する機会となったことだろう。その他、詳細はこの報告書をご覧いただきたいが、各グループによる様々な企画を通じて、学習面でも実践面でも社会との接点を常に作りながら、貢献の可能性が模索された。

今後の展望と課題

本学 COE の活動に携わった一人一人が、それぞれの研究から得られたものを、ICU での今後の教育活動に反映していく責任を担っている。それは、COE の成果を基礎としつつ、大学院教育を更に充実したものへと改善していくことも含む。本学大学院では以前から、平和研究をはじめとする独創的な研究や、海外の研究拠点との多様なネットワークが存在してきた。COE の総括をきっかけとして、「広域平和研究」として、更に展開されていくことが期待される。これまでを振り返るならば、当初は各々の問題関心から出発しつつ、グラントセオリーの構築過程で認識が次第に共有され、「広域平和研究」へと収斂していった。そこで得られたものは、各々がこれまで持っていたフレーム、視野、対象領域よりも、更に広いものとなったはずである。このことは、本学が大学院における教育面での更なる充実と、教員相互の乗り入れの可能性へとつながっていると思われる。

このような方向性は、現在本学に在籍している大学院生や、これから本学に入学してくる学生たちへの、一つの吸引力になるはずである。そうなることを目指し、強く信じて、これからの研究・教育活動を展開していきたい。2008 年 1 月の最終総括を目的とした会合もその具体的実践であり、学外ばかりでなく学内に対しても、私たちの研究成果を広く発信する試みとして位置づけた。もちろん、未だ達成できていない点もあり、それは今後の課題である。例えば、本学 COE は「all ICU」ではなかった。COE の活動に参加しなかった教員や大学院生に対しても、機会あるごとに様々な形で認識の共有を図ってきたつもりではあるが、今後も一層の取り組みが必要であろう。本学は、リベラル・アーツに立脚した、小規模かつ国際的な大学であるからこそ、研究・教育面での多様なコミュニケーションを、他大学にも増して充実させていくことが可能なのではないか。こうして、各々が自分たち自身の問題として研究・教育活動を展開し、相互に討議を重ねることをより徹底させていくならば、広域平和研究の更なる可能性も、自ずと見えてくるだろう。